

支所長よりひとこと

4月2日(金)、新大統領の就任式が厳重な警戒のもとマハトマ・ガンジー国際会議場で無事盛大に開催された。就任式参列の翌日、食料援助の引渡し式を終えた倉光大使を空港にお見送りして帰宅したら、何だかホッとして「この一年いろいろなことがあったことだなあ」と、また古文のように遠い目になってしまった。

支所便りもちょうど一年ぶりに再刊できることになりとても嬉しい。

(大山先生、佐々木さん、プロジェクトの皆さん原稿ありがとうございます。お待たせしてしまいました)

佐々木さんの原稿を読んだら帰国を宣告した時のドキドキが蘇った。私と大出さんも4月下旬にはエールフランス臨時便で一時帰国を余儀なくされ、支所の運営は現地職員にしばらく任せることになった(※1月末に山本さんが赴任しやっと通常体制に戻れました)。

ニジェールの新型コロナウイルスの状況

ニジェールの新型コロナ感染拡大は昨年3月19日に感染第1号が出てからの第1波は比較的緩やかだったが、昨年11月から第2波がきて地方部にも広がりを見せながら急増。幸い2月に入り1日当たり陽性数は一桁程度と落ち着いてきている状況だ(4月5日付累計感染者数5042人、回復数4711人、死亡188人、現在入院中13人)。ニジェールでマスクをしているのは式典や会議、アトリエなどテレビニュースのなかや病院、省庁など一部だけで、政府の盛んな呼びかけにも巷の人々は日々の糧を得るのに忙しく、マスクなど暑くてしてられない。そんな中、3月下旬には中国の援助でSINOPHARM製ワクチン40万回分が供与され保健医療関係者等への接種も最近開始された。

毎年恒例ともいえる雨期の洪水被害は、昨年は特に大きく、被災者35万人、70人以上が亡くなった。JICAはテント・毛布などの緊急援助を実施し他国援助も続いた。気候変動の影響やニジェール河床の堆砂進行が被害を年々大きくしているらしい。

依然として改善しない治安状況

治安もなかなか改善しない。今年に入ってからティラベリ州やタウア州のマリ国境方面では武装集団による襲撃が度々発生し既に300人以上が犠牲になっている。昨年8月9日にはニアメから60kmほどのクレ自然保護区で休日にキリン観光に来ていた若いフランス人NGO6名が犠牲になる襲撃事件も起き、当地ドナーコミュニティに衝撃が走った。



写真は ActuNiger.com より



ニアメ市内サガ地区

ニジェール史上初の民主的な大統領交代

昨年12月27日には5年ぶりの大統領選挙(第1回投票)が実施され、2月21日の決選投票を経て与党PNDSのモハメッド・バズム候補(61歳。前内務大臣)が元大統領のマハマン・ウスマン候補を55.66%の得票で破り、2期10年務めたマハマドゥ・イスフ大統領から政権を引き継ぐこととなった。選挙で選ばれた大統領が選挙で選ばれた大統領に移行するのは、独立以来4度のクーデターを経験してきたニジェールにとって初めてのとのこと。



写真は ActuNiger.com より

選挙戦の裏側でくすぶる火種

しかし、選挙委員会から暫定結果が発表された2月23日夕方から、不正選挙と主張する野党陣営によるデモとそれに便乗した若者たちが路上に出てタイヤや車を燃やし、ガソリンスタンドや銀行、商店を破壊する暴動が起き、インターネットが10日間ほど不通になった。



写真は ActuNiger.com より

大統領就任式2日前の3月31日未明には大統領府付近で激しい銃声が鳴り響く事件が発生。どうなることかと思ったが朝には何事もなかったように市民は普段通りに通勤している。不思議な気持ちでいたら、政府からクーデターの試みにかかわった関係者を多数逮捕し残りを捜索していると発表があった。空軍関係者が軽機関銃を積んだ3台のピックアップで実行したとされ、就任式直前まで緊張した状態が続いた。バズム大統領は就任演説で、とりわけテロ対策とガバナンス、教育への取組みを強調した。

最後に

長くなってしまったが、改めてこの支所便りに記しておきたいことがある。昨年12月5日、PASVAプロジェクト専門家の小川奈穂子さんが40歳の若さで亡くなった。日本からの突然の悲報に大きなショックを受け支所の皆で黙祷した。協力隊員時代の報告書には野菜隊員としてカレゴロの村で綿密な現状調査を行い農家のために元気に活動する彼女の姿があった。今でも「こんにちはー」と帽子をかぶりあの笑顔でプロジェクトの報告に来てくれるような気がしてならない(2020年2月号のPASVAの記事もご覧ください)。



今年もラマダンが近づいてきた。元協力隊員の皆さんはじめニジェールを愛するすべての人の想いをのせて、新しい時代を迎えたニジェールが早く平和と安定を取り戻せるようにと願っている。



ご意見・お便りはこちら！ ni_oso_rep@jica.go.jp
過去の支所便りは[こちら](#)もしくは右のQRコードから
編集長：小畑支所長 / 編集・デザイン：山本企画調査員



『支所便り』愛読者の皆さま、大変ご無沙汰しております。長年『支所便り』の編集に携わせて頂いた佐々木です。昨年3月号を最後に忽然と姿を消してから1年に及び音信不通をどうぞお許しください。

さて、この空白期間の一部始終をここでつらつらと書き並べてしまうと、とてつもなく長くなってしまいそうですので、極力手短に、まずは突如としてニジェルを去らなければならなくなった背景をお話させてください。

昨年3月といえば、言わずもがな、世界中で新型コロナの感染が広がり始めていた時期ですね。ニジェルは、この時点で感染者はまだ一人も出ていなかったということもあり、対岸の火事というか、どこか他人事のように事の成り行きを眺めておりました。しかし、忘れもしない3月17日の夜8時のローカル・ニュースで、イスフ大統領が「翌日の夜0時から、当面2週間、国境を閉鎖する」と突然緊急事態宣言を発令したのです。『あらら、これは大変なことになってきたぞ』と内心思いながら、翌朝いつものように事務所に出勤しました。すると小畑所長から、またも突然、「佐々木さん、今晚の便でお子さんを連れて帰国してもらいます」とのお達し。「えっ？」一瞬耳を疑いましたが、小畑所長の沈痛な面持ちに、これについて議論する余地はないことを悟りました。その当時、私の任期も残り1か月と迫っておりましたが、まだ1か月はある(!)という変な余裕と、愛するニジェルを離れたくないという気持ちが相まって、離任の準備はおざなりにされていました(今思えば、こういう時のために計画的に前もって準備しておくべきだったと後悔しています。後任の山本さん、本当にごめんなさい)。ただ、そうは言っても、「はい、分かりました」とその場を後にすることもできず、一先ず緊急の仕事を片付け、あれやこれやとやっているうちに時間は瞬間に過ぎ去り、気づけばもうお昼。「佐々木さん、そろそろ帰って準備してください」という小畑所長の声に背中を押され、後ろ髪惹かれる思いで「では2週間後、国境が開いたらすぐに戻って来ます!」と、努めて明るくニジェル支所を後にしました。これが、まさか最後の別れになるとは思いもよりませんでした。小畑所長はそれを予見するように、もしかしたらもう戻れないかもしれないと、最後まで私の背中を見送ってくれていました(涙)。そんなわけで、支所のナショナルスタッフにすら満足に挨拶することもできず、慌ただしく家に戻り、無邪気に戯れる当時2歳の息子をしり目に淡々と2週間分程度の荷造りをし、訳の分からぬ息子を連れて急ぎ空港に向かったのです。そう、ブルキナベの夫はというと、日本大使館のないニジェルですので、日本のビザがすぐに取りれるわけもなく、結果、一人ニジェルに取り残されることになりました(その後5か月の歳月を経て、ようやく日本で再会することができました)。

そんな悲しい幕引きではあったものの、家族のような支所員と共に過ごした2015年4月から2020年3月までの4年と11ヶ月間は、私にとって非常に中身の濃い、充実した、正に夢のような日々でした。皆さんご存知のように、2011年から協力隊派遣も中止され、近年のサヘル諸国の治安の悪化から、行動範囲はニアメに限定されていましたが、そんなことはものともしないような希望の光が常に灯り、笑い笑顔で満ち溢れている、そんな職場でした。日本人はたった3名という小さな拠点ではありましたが、出張で訪れた方々のほとんどが、支所の醸し出すアットホームでホスピタリティに溢れた雰囲気魅了され、ニジェルの虜になっていきました(これは誇張ではなく、本当です!)。そんな居心地のいい職場ですから、離れ難いという気持ちになるのは至極当然なことで、幸運なことに、私はそこに5年近くも勤務できたわけですから、本当に感謝の言葉しかありません。面と向かって、きちんと皆さんにこの気持ちを伝えたかったのですが、恐らく何もなく普通に任期満了できていたとしたら、涙もろい私はただただ号泣して終っていたかもしれせん。こうして、1年のブランクを経て、また再びこの『支所便り』でニジェルを通して知り合えた多くの方々にこの想いを伝える機会を与えて頂けただけでも有難く、とても懐かしい気持ちに浸っています。

最後に、改めまして、ニジェル支所の皆さま、またニジェルで縁あってお会いできた多くの方々、そして長きにわたり『支所便り』をご愛読して下さったニジェル・ラバーの皆さま、本当にどうもありがとうございました。またいつの日か、どこかでお会いしましょう! インシャアッラー!! (ニジェル支所便り 前編集員 佐々木天子)



最近の支所活動紹介「国家コメ開発戦略策定支援」

ニジェール政府は、食糧危機に対処するために、アフリカ稲作振興のための共同体 (Coalition for African Rice Development : **CARD**) のイニシアティブのもと、開発パートナーおよびコメ部門の主要な関係者と協力して、国家コメ開発戦略を策定しました。

10年間(2021-2030)続く国家コメ開発戦略は、「中期的には国のコメ生産の量と質の持続可能な増加に貢献すること、長期的には国際市場への輸出すること」という目的を持っています。ニジェールでは米の消費量が一般家庭で増加しているものの、まだまだ自国生産で賄うには至っておらず、そのほとんどを輸入米に頼っております。今後も人口増加が予測されるため、コメの生産量の増加は急務となっております。

5日間にわたり開催されたアトリエでは、18名のタスクフォースメンバーがホテルに缶詰めになり、深夜まで協議を行いました。生産、機材、調達、加工、販売といった各部門・分野の専門家が知恵や経験を共有しながら、90ページ以上にわたる戦略ペーパーの精緻化を目指します。3日目の昼食後にまさかの司会者がウトウトしてしまうシーンもありましたが、CARD事務局やコンサルタントのSallさんのセネガルからオンライン参加もあり、無事にコメの生産量(精米ベース)を10年間で10倍以上に増やす等の計画が承認されました。この様子は国営放送にも放映され、今後は計画の実行に向けて動き始めます。(企画調査員 山本主税)

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介：PASVA 新着任者のご紹介

「ニジェール国農業普及システム改善プロジェクト(PASVA)」の副総括/農業普及に着任しました**町慶彦**と申します。私は2015年に本案件の前身のプロジェクトVRACS※に従事した経験があり、ニジェールでの農業案件は2件目となります。この度は副総括という大役を拝命することになり、私自身どこまでできるのか不安を感じておりますが、本案件に誠心誠意努める所存です。

ニジェールでは高温少雨、土壌劣化、病害虫、近年の気象異常等、どのアフリカ諸国よりも環境的に過酷であります。一方で、このような環境下でも、切磋琢磨して農業を営む人々は多く存在し、VRACSの現地活動にて農業技術に関する意見を互いに出し合ったのは今でも良く覚えています。そんな農家とまた活動ができることを光栄に思います。しかし、ニジェールの猛暑を考えると、先が思いやられます。以前、ブルキナファソ人がニジェール人に対して電話で「今度、ニジェールに行くから気温下げておけよ!」という冗談を言っていたことがありましたが、私は本気でそう思いました。本案件での初渡航前に、現地の友人に同様の冗談を言いたいと思っておりますが、そう都合良くいかないですね…。ニジェールでの久々の業務が楽しみです。

昨年12月から農業普及システム改善プロジェクト(略称:PASVA)に業務調整／研修2で従事しています、森永太一(アイ・シー・ネット株式会社)です。これまで、国立公園・自然保護区の管理、野生生物保護など、自然環境保全事業に国内外で携わってきました。直近はエチオピアの持続的な森林管理プロジェクトにおいて長期専門家として3年間活動していました。渡航歴があるのは東アフリカの国に偏っており、ニジェールは初の西アフリカになります。また、今回は初のコンサルタントでのプロジェクト従事であり、初めて尽くしで身の引き締まる思いです。皆様には生活についてなど基本的なところからご助言いただけると幸いです。コロナ禍で現地渡航できずにおりますが、新年度の早い段階で渡航して現地を身体で理解して業務を推進していければと思っています。最後になりましたが、前任者のニジェールへの思い、熱意、そして経験には遠く及びませんが、そこに少しでも近づけるように活動していきます。よろしくお願いいたします。

以上、町さんと森永さんに自己紹介文をお送りいただきました。お二人とも経験豊富なご様子で、これからのプロジェクト運営が楽しみです。皆様のご到着をニアメより心待ちにしております！

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介：EPT

みんなの学校プロジェクト(EPT)もいよいよ今フェーズ終了が数ヶ月後に迫って参りました。前号から時間が空いたこともあり、事業について改めて松本さんにご紹介いただきました。

当プロジェクトは、初等教育と中等教育、二つの分野で活動しています。初等教育分野においては、住民の支援で実施する補習授業を効果的にするツール(教材など)を導入することで、児童の“読み書き”と“計算”の能力の改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及に取り組んでいます。また中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会(COGES)モデルの全国普及を進めています。支所便り2020年2月号でご紹介したように、当プロジェクトでは、2019年に全国8州で初等教育分野の女子就学促進をテーマに州教育フォーラムを開催し、入学児童に占める女子の割合を増加させる成果を上げました。

事業の核となる教育フォーラムとは

「教育フォーラム」とは、教育行政関係者・教員代表だけでなく、コミュニティに影響力を持つアクター(知事、市長、伝統的宗主、宗教指導者、学校運営委員会連合など)が一堂に会し、教育に関する課題と目標を共有するとともに、アクターグループ毎に目標達成のために行う活動を誓約する場です。フォーラム後、目標と誓約内容は、各学校運営委員会連合の総会で傘下の各学校運営委員会へと伝達され、各学校・コミュニティが目標に向かって一斉に取り組むというムーブメントを生み出すため、成果に繋がるのです。このアプローチを中等教育分野にも取り入れるべく、2020年は全国8州で初等・中等合同州教育フォーラムを開催しました。実は初等・中等ともに、1年生の退学率が他学年に比べて非常に高いことから、小学1年生/中学1年生の退学率の減少と、小学2年生/中学2年生への進級率の向上をテーマとしました。その結果、中学校については下表の通り、州教育フォーラム前と比較して、中学2年生への進級率は44.9%から55.6%へ10.7%ポイントも上昇、逆に中学1年生の退学率は34.2%から21.9%へ12.3%ポイントも減少させることができました。女子だけでみると改善幅は



ザンデル州教育フォーラム開会式の様子

更に大きく、教育フォーラムが女子就学促進においても極めて有効なアプローチであること

	フォーラム前 (2018/2019年度)		フォーラム後 (2019/2020年度)	
	男女計	女子	男女計	女子
中学2年へ進級	44.9%	44.6%	55.6%	57.5%
進級前に退学	34.2%	33.4%	21.9%	20.0%

が再確認できました。

表：中学1年生の進級率・退学率

更にどのような取り組みが、中退率や進級率の改善に大きく貢献したのか調査を行った結果、補習授業の実施、親・コミュニティ・児童に対する啓発活動、児童同士の啓発活動、誓約の実施状況を確認するモニタリング委員会の設置、母親会の強化など、さまざまな活動が各学校・コミュニティのイニシアチブで行われていたことが分かりました。各地で自分たちのコミュニティに適した取り組みが行われていたことは、ニジェール人の底力を感じさせるものであり、プロジェクト関係者にとっても嬉しい驚きとなりました。プロジェクトでは、引き続きコミュニティの能力を最大限に活かせるような工夫をし、女子就学向上の促進を図っていきます。（みんなの学校プロジェクト専門家：松本千穂）

ニジェールでゴミを集める日本人（第28回）

～友人の「コロナはない」という言葉のおかげで～

支所便り2016年7月号から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一先生の「ニジェールでゴミを集める日本人」シリーズ第28話。今回はコロナ禍の心境を執筆頂きました。

新型コロナウイルスの流行により、世界は大きく変化した。2020年3月以降、感染力や感染ルート、症状、致死率、治療法などが分からぬまま、不安のなかで、われわれの時間は推移した。日本では4月から6月ころにかけてマスクや消毒薬、トイレトペーパーやティッシュペーパーまでもが店頭より消えてしまい、食料品も品薄状態がつづいた。われわれはマスクを洗って再利用したり、マスクを手作りしたり、二重に着用したり、政府からの支給品を使ったりしてしのいだ。日本でわれわれが外出するとき、マスクをつけることは日常的となったし、生活のなかで入念な手洗いやアルコール消毒は習慣となった。業種や会社の規模によって導入の度合いはちがうものの、在宅勤務やリモート会議という言葉も定着した。飲食業や旅行業、旅客輸送業を中心に苦境に立つ業種も多く、心が傷みます。

JICAニジェール支所の活動が再開され、ニジェール支所便りが2020年3月の刊行をもって休刊に入った。ほぼ1年間の休刊状態がつづいたのち、刊行が再開されることを心から喜びたい。わたしが初めて2000年にニジェールを旅行したのち、1年以上、ニジェールへ行かなかったのは今回が初めてです。

日本政府外務省が発表するコロナの感染症レベルによると、2021年2月26日現在、ニジェールは隣国のチャドやブルキナファソ、マリ、ベナン、トーゴとともにレベル2（不要不急の渡航は止めて下さい）である。わたしが所属する大学の規則によると、レベル2のニジェールへは出張に出かけることも可能であるが、現時点では気軽に渡航できる雰囲気にはありません。WHO（世界保健機関）の発表によると、2021年2月26日現在のニジェールの感染者数は4740人、死亡者数は172人である。ここ数日間には1日あたりの死者数が10人以下の日が続いている。この発表データは、果たしてほんとうなのだろうかと疑問を感じることもあるが、信じるほかありません。

Facebookのメッセージや電話で会話すると、ニジェールの友人たちは皆、「周囲にコロナはない」と話す。若者たちが結婚したり、子どもが生まれたり、日々の生活や仕事を教えてくれたり、お金がないので送金して欲しいという無心を受けたりもする。そんな会話をする友人たちに、マスクをしている者はいない。ニジェールの友人たちは、以前と変わらない生活を送っている。「地方都市のドゴンドッチではコロナの感染症はないと発表されている。オーヤマ、なにを怖がっているんだ」という声も聞こえてくる。彼らからのメッセージにも、コロナはないと書かれている。そんなやりとりから、平穏な暮らしが伝わってくる。

ただし、農村では老人たちが亡くなっている。2000年にわたしを村へ迎え入れてくれた村長のサイドゥ(60代)は5月に亡くなってしまった。その葬儀の写真はメッセージで送信され、わたしはショックを受けながら弔いの挨拶を返信した。8月にも80代のマガワタが亡くなった。息を引き取るまえに高熱を出し、せきが続けていたのだという。いつものごとく、だれもが死因に言及することを避けているが、わたしはその容体を聞くにつれ、新型コロナ感染症だったのではないかと疑っている。真実は分からない。農村では長老たちが住民をまとめあげ、コミュニティ内の争いを解決へ導く役割を担ってきた。そんな長老がいなくなるのではないかという一抹の不安がよぎる。ニジェールへ行ける日が来ることを信じてつつ、すこしでもニジェールが近い存在になるよう、この不定期連載を続けていきたいと思っています。よろしくお願いします。

巻末連載企画！新装★ODのヒヤリハット



Y新編集員から「リニューアルに伴いこれから支所便りの記事は“ODのヒヤリハット”で」と依頼がありました。「そんなに危険な目にいつも遭ってないし、ネタが続かない」と言ったのですが、実はいろんな場面で毎日危険と隣り合わせ。周囲に潜む日常の危険についてお伝えしていけたらと思います。

1. 大統領選暫定結果発表当日

2月21日に第2回大統領選が行われ、翌々の2月23日火曜日には暫定結果が発表となりました。発表された結果は現与党候補の勝利。その日は日本の祝日で支所はお休み。友人宅で15時頃からケーキを持ち込んでティータイムを楽しんでいたところ、出かけたばかりの友人家族から「すぐ近くの大通り周辺で市民の暴動が起こっているから外に出ないように」との電話。「暴動？ニアメ市内で？」外を見てみると遠くで黒煙が上がり、タイヤの焼けるような嫌な臭いが立ち込めています。これは困った、とにかく何か起きています。支所長、同僚に連絡し情報を待つこととしました。その後事態は大きくなっていき、市内のあちこちで同じような騒ぎが起こっているらしい。18時まで待ち、「これ以上遅くなると夜になってかえって危険。裏道を通って帰ろう」と運転手と私で帰宅を決意。いつも渋滞の18時過ぎにも関わらず、通りは閑散。見えるのはタイヤやらが炎上している黒煙、転がる瓦礫、私たちの車を猛スピードで追い抜いていく武装した治安部隊の車。いつもクールな運転手が必死な形相で運転し、通ったこともないような砂道や、やっと車一台通る細道を通して何とか我が家に着いたときは、安堵の気持ち以外ありませんでした。翌日、職場では恐怖の一日についてみな震え上がって話していました。これまでになかった市民の暴動にびっくりしていたのは私たち外国人よりもニジェール人だったと思います。



2. ガスバクハツ

娘のリクエストでチョコレートケーキを作ったある日、ガスオーブンの火がついていないことに気づいて、着火したと同時に、ものすごい音で「ボン」とガスオーブンが前後左右に一瞬膨らみました（膨らんだように見えるほどすごい音でした）。ガス爆発です。幸い爆発はオーブンの中だけで済みましたが、背筋はゾッ。。。目に見えないガスの恐ろしさ、身をもって知りました。



3. オマケ：1年経って

ヒヤリハットではありませんが、新型コロナの流行で帰国した2020年4月から、久しぶりに戻ったニアメにはいくつかの小さな変化がありましたのでご紹介。



今はなき恐竜の像

一つ目はヤンタラ交差点の**恐竜の像**。ニジェルは、昔ほぼ完璧な形で巨大恐竜の化石が出たこともあるそうで、それを象徴しているのかなと思います。その像はものすごく大きい癖にどこか滑稽。まず足が細くて長い。顔が小さすぎ。そのユーモラスな出で立ちのせいでSNS上では国民からの酷評の嵐。結果、完成前に工事ストップの後、久しぶりに通ってみたら影も形もなくなっていました。あまりの評判の悪さに消えた恐竜。威風堂々と帰ってきてほしいものです。

二つ目はプラトーとクアラカノの真ん中にできた新しいNiceなスーパーマーケット“**Epicerie du levant**”。明るく清潔で、ワイン売り場は赤・白・ロゼが燦然と輝いています。特に精肉売り場は各種プロシエット、サラダなどのお惣菜が色とりどりで、豚肉ソーセージはBBQに最高。少し価格が他より高めかなと思うものもあります。宅食の増えた支所の日本人の飲食を支える大事な

存在です。注目すべきはレジ台のベルトコンベアーが壊れず動くこと！そして受け取るお釣りも新札新コイン！農業プロジェクトPASVAの皆さん、乞うご期待。そのほか、待ち時間をカウントダウンする信号、第3の橋、快適なウィークリーマンションなどなどありますが続きは次回。（企画調査員 大出理恵）

新編集員よりご挨拶

さて、今月号はいかがでしたでしょうか。文末となってしまいましたが、新編集員により挨拶申し上げます。

『支所便り』愛読者の皆さま、初めまして。佐々木前編集員からバトンタッチを受けました山本主税（ちから）と申します。新型コロナウイルスの影響により、当初より9カ月間遅れた2021年1月末ようやくニアメに到着することができました。呼吸をするたびに肺に入る熱気。窓を閉めていても机の上に溜まる砂埃。信号で停まった車のフロントガラスを勝手に拭いてくる子供たち。オンラインでは知りえない、まさに百聞は一見にしかずという言葉、身をもって実感する日々が続いております。まだまだニジェル経験が浅く、佐々木前編集員には遠く及びませんが、これからもニジェールの魅力や事業の様子などを通じて、より多くの方にニジェルについて触れていただく機会となればと思っております。試行錯誤しつつ、精一杯取り組んで参りたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。